

熊本県の林業を語る

木材にとってかわろうとしている新建材の発達：外材との競合で変動する木材価格：パルプ原木としての国内需要は果してのびるだろうか：急がれる流通対策をどうしたらよいか等々―転機に立つ熊本林業の当面する諸問題を大いに語って貰った。



とき・1964年6月10日
ところ・熊本市クラブキャッスル

―適地適植を忘れずに

まずお話に入って頂きます前に木材関係の流通面あたりいろいろな問題のきつかけがありそうに思うのです。藤本さんいかがでございますか。木材の流通面あたりでこれはといったようなことを……藤本 今までのデータを見てみますと、三十七年度経済の熊本県の生産額が百十九億で所得額が二十八億という数字でございます。中小の製造業者の中におけるウ



ェイトでは第二位であったわけですが、それが現在三十八年、三十九年度では非常に減少したということは、結局、熊本県の杉が県外に出ない、それで所得が思わしく伸びない。農産物あたりはよく県

外に出て、PRもよくゆき届いているようですが、木材加工関係ではPRの点が非常に不足しているのではないかと思うんです。――杉が売れなくて楡なら売れるというのが今の問題ですか。藤本 ええまあ、杉だけというわけではないんですが、関東、関西でございますしたら、運賃面が高くなるということと、杉材は外材の影響をうけてなかなか難しいということですね。



――犬童さんいかがですか、杉が売れないということについて。犬童 藤本さんのお話のように、杉材は外材との競合関係にあるのですね。現在のところは杉の値段がどうももうま

△出席者▽

- 熊本木材K.K.社長 藤本照信
- 県森林組合連合会長 犬童俊一
- 水源森林組合長 魚住一海
- 十條製紙K.K.山林部長代理 宮本徹也
- 県竹材協同組合専務理事 菅野種友
- 県椎茸農業協同組合専事 筑紫竜雄

(発言順)

司会： 県林務部長 鈴木知男

ます。楡は構造材、特に土台角といったような面で珍重がされております。

又、外材との競合関係もかかってくるというところで、今のところ杉材と楡材は価格の面でかなりひらいております。しかし将来の木材の需要の動向を考えるとパルプ原木としての国内需要というものは将来ともに伸びるのではないかと、建築材としての需要の伸びは、余り期待できぬのではないかと考えられるのです。

というの、建築様式が変ってきている、つまり木材にかわるべき新建材の発達がめざましいものがありますね。そういう面から考えると、われわれが林業経営をやる場合、只、建築材を造成するための造林ということではなくて、パルプ資源としての木材の造成といった点も考

なくてはならない。

何といつても楡より杉の方が成長率が大きいんですね。そういうことで、われわれ林業家は現在、或は将来の木材需要にマッチするような生産方式をとらざるを得ないというふうな考えざるを得ない。しかし今植える木がためになるのは三十年、四十年先ですから、先のこととはどうなるかわからない。今から四、五十年前に今日の木材界あるを予見して植えたかどうかと同じで、これから先どうなるかわからない。そこでまあ杉とか楡とかいわずに、適地適木でやっていくべきではないか。

又、針葉樹林一辺倒でいくのも危険だと思われ、広葉樹林も或程度残していくべきだと思えます。そこで広葉樹林と針葉樹林と割合をどの程度にやっていくことが適当であるかの判断が又問題ではないかと思えます。又、針葉樹林の中にも松の造林とか、杉の造林、楡の造林などをどうするか。原則はやはり適地適植といった方向で進んでいくべきではないかと思えますがね。

―パルプ需要は伸びるか

魚住さんいかがです。現地の森林組合、或は中小規模の林家はいま犬童さんのお話に出ましたようなことをお一人お一人考えて造林をされているのが現実なのでしょうか。

魚住 犬童さんのおっしゃったことで、将来の見透しというものがどういうことになるかという適切な例ですが、従来菊池の方では松の植林をやったのが、ここ五、六年前から盛んになりはじめた。ところが途端に松というものが三文がたもなくなくなってしまったのです。お先真っ暗なんで困っているわけです。



――何のために、何の用途の材をつくろうというふうな考えて植えてるものですか。魚住 やっぱり、いなくても適地適植はやってるようですが、例えば谷間の肥沃地には杉で、上の方の急傾斜の場所には楡を植えるとかでやっていますが、これを楡にかえて松を植えたのがどうも十条さんの方で全然とっていただけないというところで……(笑)

宮本 どうもそういうお話が出てくるだろうと思っておりましたが……まあ私どもの方からいましては、先きほど犬童さんからお話がありましたように、今後パルプ需要は伸びるだろうということは具体的に申し上げまして、通産省の産業構造調査会のパルプ材材部の答申が出ておりますが、昭和四十二年にはパルプの



伸びが、現在紙の消費率が年間一〇％伸びておりまして、原木の方も使用量が伸びていることは明らかで、四十二年には全国で、パルプ原木としての使用量が二千二百万m³だということがのべられています。三十六年が千五百万m³程度ですから五〇％程度の伸びと、数量から行きますと大変な伸びだということなのです。それに関連しましてやはり需要と供給の関係がどうなるだろうかということを中心配致しているわけです。その四十年の答申では二千二百万m³の中の外材あたりを輸入したといたしまして、三百五十万m³ぐらいは足らないだろう、これをどういう具合に対策をたてるだろうかと思申しております。

それからいま魚住さんからご批判がございましたけれども、確かに松を植えている、そして松は現在までの間ではパルプ原木としては代表的なものであったのですけど、そういったパルプ原木の将来の需給関係といったものをいろいろ考えてみまして、パルプ会社自体がどういった方向に入るかということになりまして技術的にみますと、松から雑へ、これはコストの問題もありますが、逐次松から雑へ移行するであろうということと、又、原木の素材に比べて購入チップという問題が非常に大きくクローザップしてまいりました。素材からチップへ移行する、この二つの問題が今後のパルプの行き方になるだ